

先島の集落遺跡からみた 琉球の帝國的様相

Imperial Aspects of the Kingdom of Ryukyu from the Perspective of
the Ruins of Settlements in Sakishima Islands

村木二郎

MURAKI Jiro

はじめに

①中世先島の集落研究

②先島の細胞状集落遺跡

③陶磁器からみた先島の集落

④海上帝国琉球

おわりに

【論文要旨】

八重山・宮古といった先島諸島には、沖縄本島では見られない石積みで囲われた集落遺跡がある。発掘調査によってそこから出土する中国産陶磁器は膨大で、それらの遺跡は13世紀後半から14世紀前半に出現し、15世紀代を最盛期とする。しかし16世紀代の遺物は激減し、この時期に集落が廃絶したことがわかる。竹富島の花城村跡遺跡に代表される細胞状集落遺跡は、不整形な石囲いが数十区画にわたって連結したもので、その外郭線は崖際にさらに石を積み上げた防御性をもったものである。このような遺跡が先島の密林に埋もれており、その多くは聖地として現在も祀られている。

宮古地域では15世紀の早い段階で廃絶する集落遺跡が多数みられる。近年発掘調査され、陶磁器調査を実施したミスズマ遺跡はその好例である。八重山地域はやや遅く、15世紀後半から16世紀前半のある段階に廃絶する集落が多い。細胞状集落遺跡はいずれもこの時期に終焉を迎えており、八重山に劇的な出来事が起こったことが想定される。ちょうど第二尚氏の尚真王の時期に当たり、太平山征伐（オヤケアカハチの乱）の影響と考えられる。すなわち、琉球王府によって、独立文化圏をなしていた先島が侵犯され、この地域が琉球の一地方として併呑されたことを示すのである。

先島地域の中世を語る文献資料はほとんどなく、近世になって琉球王府が編纂した史書によってこの地域の歴史は語られてきた。しかし、集落遺跡やその遺物は実は豊富に残されており、これら进行分析することで先島の独自性とそれを呑み込む琉球の帝國的側面を論じる。

【キーワード】 集落遺跡、細胞状集落、花城村跡遺跡、陶磁器、オヤケアカハチの乱

はじめに

15・16世紀の東アジア海域は、世界史の中の大航海時代を前に、すでに活発な交易がおこなわれていた。その立役者は琉球王国である。大明帝国は海禁政策を建て前としたために自由な貿易ができず、冊封体制下にある琉球王国に貿易公社としての役割を担わせた〔岡本2010〕。これを逆手に、琉球は明と東南アジア諸国、朝鮮、そして日本をつなぐパイプ役として積極的な交易活動を展開し、「大交易時代」を現出したのである。

従来、琉球王国は明の冊封体制のなかで中継貿易国家として存立したが、ヨーロッパ勢力のアジア進出によって存在感が弱まり、日本に統一政権が成立すると、その尖兵である薩摩の侵攻を受けて支配下に入った、という受動的なトーンで語られがちであった。

しかし、昨今の研究では、この時代を作った琉球王国は、諸外国との複雑かつ柔軟な外交交渉を通して巧みな交易活動を積極的に展開したことがわかっている。東南アジア諸国とは対等な関係を作り上げ、南九州の諸勢力に対しては時には優位な関係を築きもしている〔村井2011〕。

そして何より、琉球とは異なった文化をもつ奄美諸島や、宮古、八重山といった先島諸島に侵攻し、中央集権的な体制で支配したのである。のちに奄美は薩摩に割譲されて現在は鹿児島県に含まれるが、先島諸島は近世期も琉球王府の支配下にあり続けて現在の沖縄県域に至っている。そのためか、先島に関しては所与のものとして琉球領土と認識されており、1500年に八重山で起こったオヤケアカハチによる蜂起も“反乱”，“鎮圧”と表現される。しかし、戦後に米軍が日本を支配した際、琉球とは別に、奄美、宮古、八重山を個別に群島支配したように、これらの地域は琉球とは異なる文化圏であり、強権をもった時代の琉球帝国によって版図とされたのである。

先島や奄美には文献資料がほとんど残っていないため、『中山世鑑』『中山世譜』『球陽』といった近世になって琉球王府が編纂した史書によって語られてきた。そこに記された記述は琉球王府による中央史観であり、宮古や八重山に住んでいた人びとは琉球王国によって文明化されたという文脈で位置づけられている。一方で、オランダの文化人類学者であるコルネリウス・アウエハントが20世紀半ばに調査した八重山の波照間島には、中世の集落遺跡と密接に関係する祭祀や伝承が残っているなど、社会的・宗教的諸相に色濃く中世の影が落ちているのである〔C.アウエハント1985〕。波照間島では今なお中世陶磁器が採集でき、中世集落の廃村である石囲い集落遺跡のなかには、現在は聖地として祀られて大切に保存されているものも多い。これらの考古学的資料は、琉球王国を相対化し、先島・奄美を含めた中世琉球史の再考を迫る可能性を秘めているのである。本稿では先島の集落遺跡について、遺構・遺物情報を整理してその消長を明らかにする。そのうえで先島の独自性と琉球帝国の影響を検討することを目的とする。

①……………中世先島の集落研究

先島の集落研究について先鞭をつけたのは、人類学的調査であった。文献資料のない世界だけに、文化人類学的関心から、日本列島の原風景、古層の村といった対象として注目された。そのため、

現在の集落との連続性に関心が向けられており、現在と断絶した「遺跡」としての捉え方がなされるのは、かなり遅れることとなる。

先島の中世集落遺跡は、石積みをもつものが多く、ビロースク、ハナスク、マシユク、ミシユクなど、呼称も含めてグスクとの区別が不明瞭である。そもそもグスクとは沖縄本島の城塞的な遺跡だけを意味するものではなく、もっと小規模なものから集落も含めた広い概念で使用される。そのため、それがむしろ幸いしたのか、沖縄県教育委員会によっておこなわれたグスク分布調査の一環で、宮古・八重山の中世集落遺跡が認識されるようになった〔沖縄県教育委員会 1990a〕。1987～89年度に実施された宮古におけるグスク分布調査の報告書では、沖縄本島にあるようなグスクが宮古にもあるのかという問題も含めて、「グスク（グシク）の呼称の有無にかかわらず主に小高い丘への立地と石垣、さらに宮古式土器や中国陶磁器などを出土する遺物（ママ）をグスクとして扱う」としている。これによって、城塞とは異なる集落遺跡を含んだ多くの遺跡がすくい上げられた。これに際して、多くの重要な遺跡の見取り図が作成され、オイオキ原遺跡や箕島遺跡の測量図などはその後の研究の基礎資料となっている。引き続いて1990～93年度には八重山のグスク分布調査が実施された〔沖縄県教育委員会 1994〕。この段階ではすでに城塞的グスクではなく、集落遺跡調査としての意図が明確化されており、基礎資料の収集が図られた。

そうしたなかで発掘調査されたのが、竹富島新里村遺跡である〔沖縄県教育委員会 1990b〕。道路の開発に伴った調査であったため長い調査区が設定され、真中の井戸を挟んだ東西に、石積み囲いがよく残る西村と、石積みが基礎部分しか残らない東村が展開していた。出土陶磁器から、東村は12～13世紀代、西村は14～15世紀代の集落とされ、集落の石積みは14世紀以降に出現すると捉えられた。新里村遺跡の西村で見られるような不整形石囲いが連結した集落遺跡は、グスク分布調査でも認識されてきていた。これらの遺跡からは14～15世紀の陶磁器がしばしば採集されており、新里村遺跡は発掘調査によってその性格を明確に示す画期的な成果と位置づけられている〔金武 1999・2015〕。

こうした流れを受けて、国立歴史民俗博物館が1993～95年度に実施した特定研究「列島内諸文化の相互交流の研究－奄美・沖縄の文化とその展開」では、八重山の中世村落遺跡に注目し、波照間島マシユク村跡遺跡、同ブシヤー遺跡、竹富島花城村跡遺跡、同フージャスクミ遺跡、同新里村遺跡の測量図を作成した。これらの成果を踏まえて小野正敏氏は、八重山に残るこうした石囲い集落遺跡は先島一帯に広がるもので、沖縄本島には見られない。しかもその多くは15世紀段階で廃絶し、現在残る集落とは断絶した存在である、ということを明確にした。そしてこれらの遺跡こそが、琉球王国とは別の文化圏を形成した先島の独自性を証明するものであり、琉球王国の版図に取り込まれるなかで遺跡は廃絶していったと位置づけた〔小野 1999・2010〕。小野氏の一連の論考は、その地に残された伝承や御嶽との関係など多岐にわたるが、これらによって先島の集落遺跡のもつ歴史的意義づけは確定したといえよう。

発掘調査による資料の増加などがないためか、その後先島の集落遺跡に関する研究はなかなか進展しなかった。そのようななか、宮古のグスク時代に関して出土遺物から考察した久貝弥嗣氏の成果は注目される〔久貝 2014〕。グスク時代、すなわち日本列島中世併行期（以下本稿では中世と呼ぶ）の遺跡から見つかった中国産陶磁器を分類し、遺跡の存続期間によって3タイプの遺跡群を設定し

た。なかでも13世紀後半から15世紀前半に栄えたもののそこで^{たかうす}廃絶してしまう「高腰タイプ」とされる遺跡群は、石積み遺構を伴うものが多く、八重山の新里村遺跡や花城村跡遺跡と通じるものがある。

宮古島ミヌズマ遺跡は広範囲の発掘調査により、複数の掘立柱建物跡等が見つかった。現在報告書は作成中であるが、15世紀後半代の陶磁器は全く出土しておらず、典型的な高腰タイプの集落遺跡である。石積み遺構は伴わないものの、この時期に廃絶する集落遺跡の姿がまたひとつ加わったわけであり、今後の研究を進めるうえで非常に重要な遺跡と位置づけられる。

文献資料がほとんどないため、近世の琉球王府によって編纂された史料によって描かれてきた先島の歴史であったが、このように遺跡や遺物は豊富に残されている。こうした考古資料によって先島の歴史を語ることで、琉球王府の論理とは違った世界が見えてくるに違いない。そのことは歴史を考えるうえで、我々に大きな示唆を与えてくれるであろう。

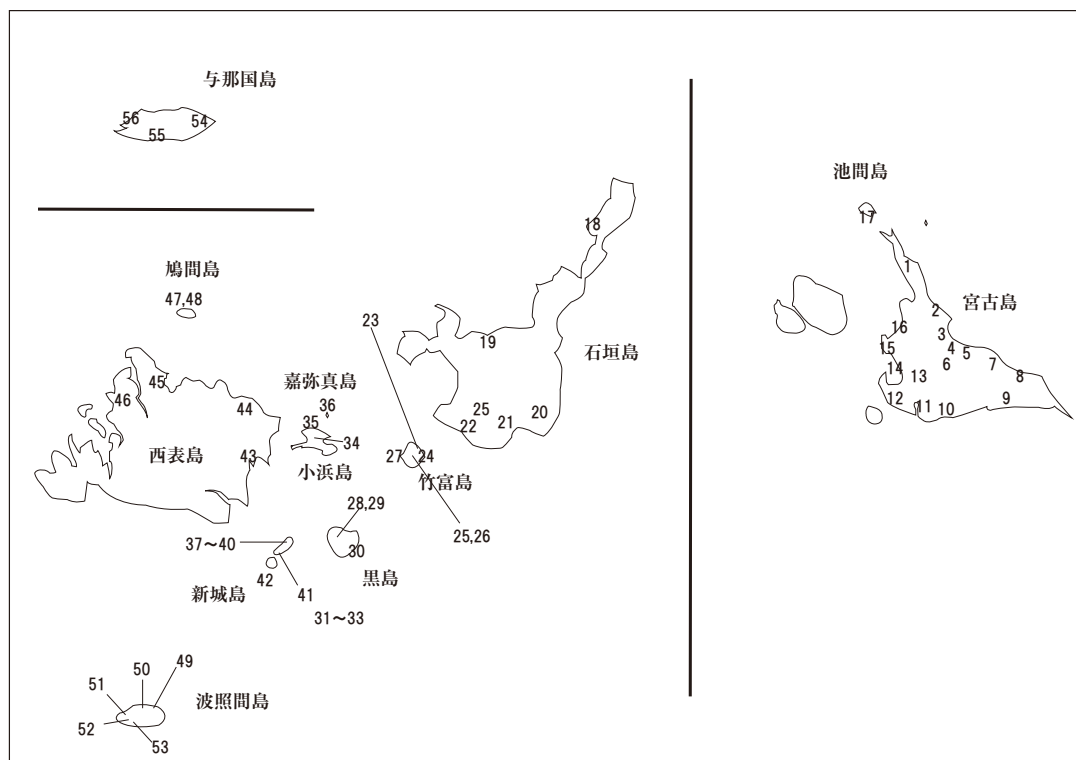


図1 先島の集落遺跡

②……………先島の細胞状集落遺跡

近世の編纂物によると、15世紀後半の八重山には多くの豪族・英雄たちが存在したという。石垣島には、北東の平久保半島に平久保加那按司^{ひらくぼかなあじ}、北西の川平に仲間満慶山英極^{なかもみつけまへいきよく}、南の石垣に長田大翁主^{なへたうふうしゅ}、大浜にオヤケアカハチである。波照間島には、長田大翁主とオヤケアカハチの生誕地とされる場所があり、彼らは石垣島へ移り住んだことになっている。西表島には祖納に慶来慶田城用緒^{けらいけだぐすくようしゅ}が、

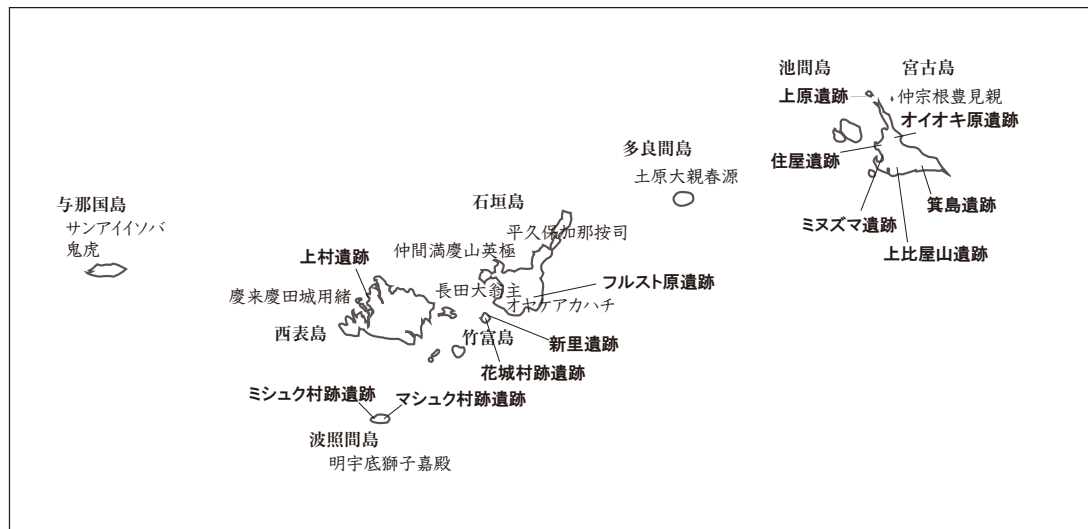


図2 先島の英雄と集落遺跡

波照間島には明宇底獅子嘉殿^{みうすくししかどん}があり、遠く与那国島では女酋長サンアイソバが強勢を誇ったという。さまざまな伝説に彩られてはいるが、各地に有力者が割拠していた様子がしのばれる。

また、1500 年に「オヤケアカハチが謀叛を起こして貢納を 3 年も怠っている」として、尚真王が軍を差し向けるにあたり、その尖兵となったのは宮古島の仲宗根 豊 見親^{なかそねとうゆみ}で、多良間島の土原大親^{ふたばらうふや}春 源もそれに従った。地政学的に沖縄本島に近い宮古島・多良間島は、すでにこの時期には琉球王府の傘下にあったのだろう。

こういった「歴史」の一端を伝えるのが、先島に残る石積みで囲われた集落遺跡である（表 1）。なかでも不整形区画の集合体である細胞状集落は先島特有の集落形態であり、今なお密林の中にその遺構が良好な状態で残っているものもある。これらを中心に島ごとの様相をみていくこととする。

(1) 竹富島・花城村跡遺跡

竹富島の花城村跡遺跡は、中世の久間原村と花城村と考えられるふたつの集落からなる。遺跡の北側は最高所で 4 m くらいの落差のある断崖で、その上にさらに 2～3 m ほど石を積み上げている。断崖の下には井戸が 4 か所設けられており、島では貴重な水の確保も図れる。崖の内側には東西約 500 m、南北約 200 m にわたって、石囲いの屋敷が 40 区画ほど広がる。集落のなかに道路はなく、屋敷を囲う石積みの一部を切って出入口としており、人びとは互いの屋敷内を通して行き来していたようだ。それぞれの屋敷の形状は不定形で大小さまざまな大きさの屋敷が、細胞状につながり広がっている。1995 年に国立歴史民俗博物館が特定研究「列島内諸文化の相互交流の研究－奄美・沖縄の文化とその展開」における調査の一環として測量図を作成した（図 4）[小野 1997]。

花城村跡遺跡は竹富町教育委員会によって 1997 年と 98 年に発掘調査がおこなわれた。97 年は久間原村側の 5・6 号屋敷、98 年は花城村側の 35・37 号屋敷が調査され、5・6 号屋敷の調査については概要が報告されている[仲盛 1999]（図 3）。それによると、トレンチ調査をおこなったのは北側が崖線になる小規模区画の 5 号屋敷で、東側の 6 号屋敷との間、南側の 7 号屋敷との間の石積みの状

表1 先島の集落遺跡

	島	遺跡	発掘	採集	図	石積	崖	形状	12	13前	13後	14前	14後	15前	15後	16	17	時期	典拠
1	宮古島	大浦多志城跡				○												高腰タイプ	沖縄県教委 1990a・久貝 2014
2		オイオキ原			○	○	○	細胞状											沖縄県教委 1990a
3		石原城			○	○	○	石囲?											沖縄県教委 1990a
4		西銘城跡			○	○	○	石囲										高腰タイプ	沖縄県教委 1990a・久貝 2014
5		サガーニ			○	○		石囲											沖縄県教委 1990a
6		牧の頂			○	○		石囲											沖縄県教委 1990a
7		高腰城跡	○		○	○	○	石囲										高腰タイプ	城辺町教委 1989・久貝 2014
8		野城	○				○											高腰タイプ	沖縄県教委 1990a・久貝 2014
9		箕島	○		○	○	○	細胞状										14～15世紀	沖縄県教委 1990a
10		上比屋山	○		○	○		細胞状										14～15世紀	沖縄県教委 1990a・山本 2019
11		手真嘉城跡			○	○		方形石囲											沖縄県教委 1990a
12		久場嘉城跡			○	○		方形石囲										高腰タイプ	本村 2007・久貝 2014
13		大嶽城跡				○	○	石囲?										高腰タイプ	沖縄県教委 1990a・久貝 2014
14		喜佐真御嶽			○	○	○	石囲											沖縄県教委 1990a
15		ミヌズマ	○		○													高腰タイプ	久貝 2014
16		住屋	○		○														平良市教委 1983
17	池間島	上原			○	○	○	細胞状										14～16世紀	山本 2004
18	石垣島	吉野				○	○											第三期	沖縄県教委 1994
19		富野	○			○												14～16世紀	石垣市教委 2000
20		ウイズ		○		○	○											第三期	沖縄県教委 1994
21		フルスト原	○		○	○	○	細胞状										第三期	石垣市教委 1984
22		ビロースク	○			○	○											12～13、14～15世紀	石垣市教委 1983
23	竹富島	新里村	○	○	○	○		細胞状										13後半～15前半	沖縄県教委 1990b
24		花城村跡	○	○	○	○	○	細胞状										14中～15世紀	仲盛 1999
25		ンブフル	○	○		○												14末～15・16世紀	沖縄県教委 1994
26		フージャヌクミ		○	○	○		細胞状										第三期	沖縄県教委 1994・小野 1999
27		カイジ村跡				○												12～16・17世紀	沖縄県教委 1994
28	黒島	ウブスク		○		○	○	円形単郭										第三期	沖縄県教委 1994
29		ザンドウ			○	○	○	円形単郭										第三期	沖縄県教委 1994
30		アラスク		○	○	○	平地	円形単郭										第三期	沖縄県教委 1994
31		フカスク		○		○		円形単郭										第三・四期	沖縄県教委 1994
32		ヴェウスク				○	平地	円形単郭										第三・四期	沖縄県教委 1994
33		クスリチ				○												第三・四期	沖縄県教委 1994
34		ウティスク山				○	○	双郭										第三期	沖縄県教委 1994
35	小浜島	ユウンドウレースク			○	○	○	双郭										第四期	沖縄県教委 1994
36	嘉弥真島	嘉弥真				○		遠見台か										第三・四期	沖縄県教委 1994

	島	遺跡	発掘	採集	図	石積	崖	形状	12	13 前	13 後	14 前	14 後	15 前	15 後	16	17	時期	典拠
37	新城島	ニシヌブシマ ヤー	○		○	○	○	遠見台か										第三期	沖縄県教委 1994
38		ボンヤマー				○		遠見台か										第三期	沖縄県教委 1994
39		イーウガン				○	○	遠見台か										第四期	沖縄県教委 1994
40		アールウガン				○												第四期	沖縄県教委 1994
41		ウブドゥムル				○												第三期	沖縄県教委 1994
42		マヒヤン村跡				○												第四期	沖縄県教委 1994
43	西表島	古見赤石崎		○		?												第三期	沖縄県教委 1994
44		高那城跡				○	○	遠見台か										第三期	沖縄県教委 1994
45		船浦		○	○	○	○	単郭										第三期	沖縄県教委 1994
46		上村	○	○	○	○		細胞状										14 中～15 世紀末	沖縄県教委 1991
47	鳩間島	ナーマヤーヤ シキ		○		○												第三期	沖縄県教委 1994
48		ブシンヤー				○												第三期?	沖縄県教委 1994
49	波照間島	ブリブチ (下 田原城跡)			○	○	○	細胞状										第三期	沖縄県教委 1994
50		マシユク村跡		○	○	○	○	細胞状										第三期	沖縄県教委 1994・小 野 1999
51		ミシユク村跡	△	○	○	○		細胞状										第三期	沖縄県教委 1994
52		ペーミシユク 村跡			○	○	○	双郭										第三期	沖縄県教委 1994
53		ブシヤー			○	○													小野 2020
54	与那国島	与那原	○	○														第三期	与那国町教委 1988
55		西真嘉				○												第三期	沖縄県教委 1994
56		伝ダンノアジ 屋敷				○		遠見台か										第三期	沖縄県教委 1994

高腰タイプ: (12～13 中) 13 後～15 世紀前半
第三期: 13～15 世紀
第四期: 16～17 世紀

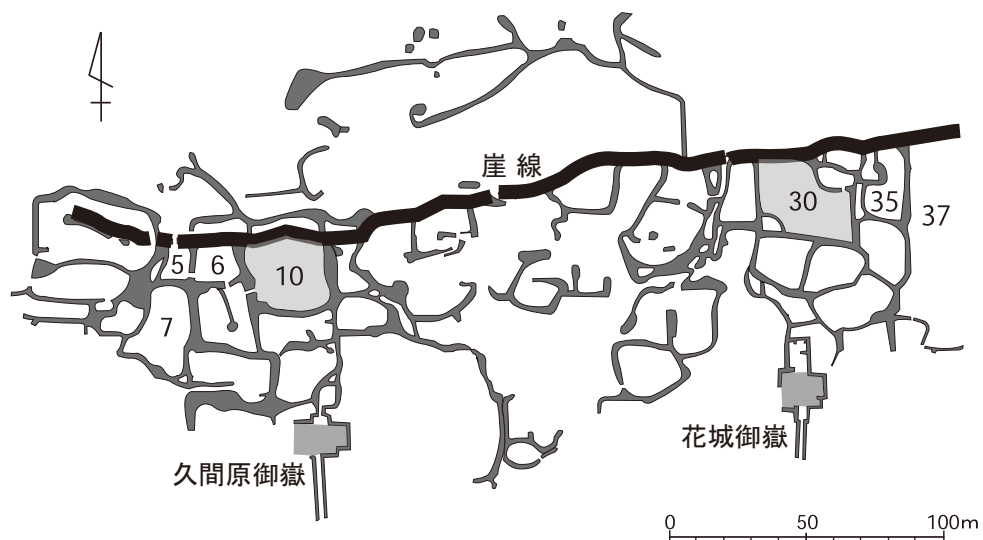


図3 花城村跡遺跡模式図

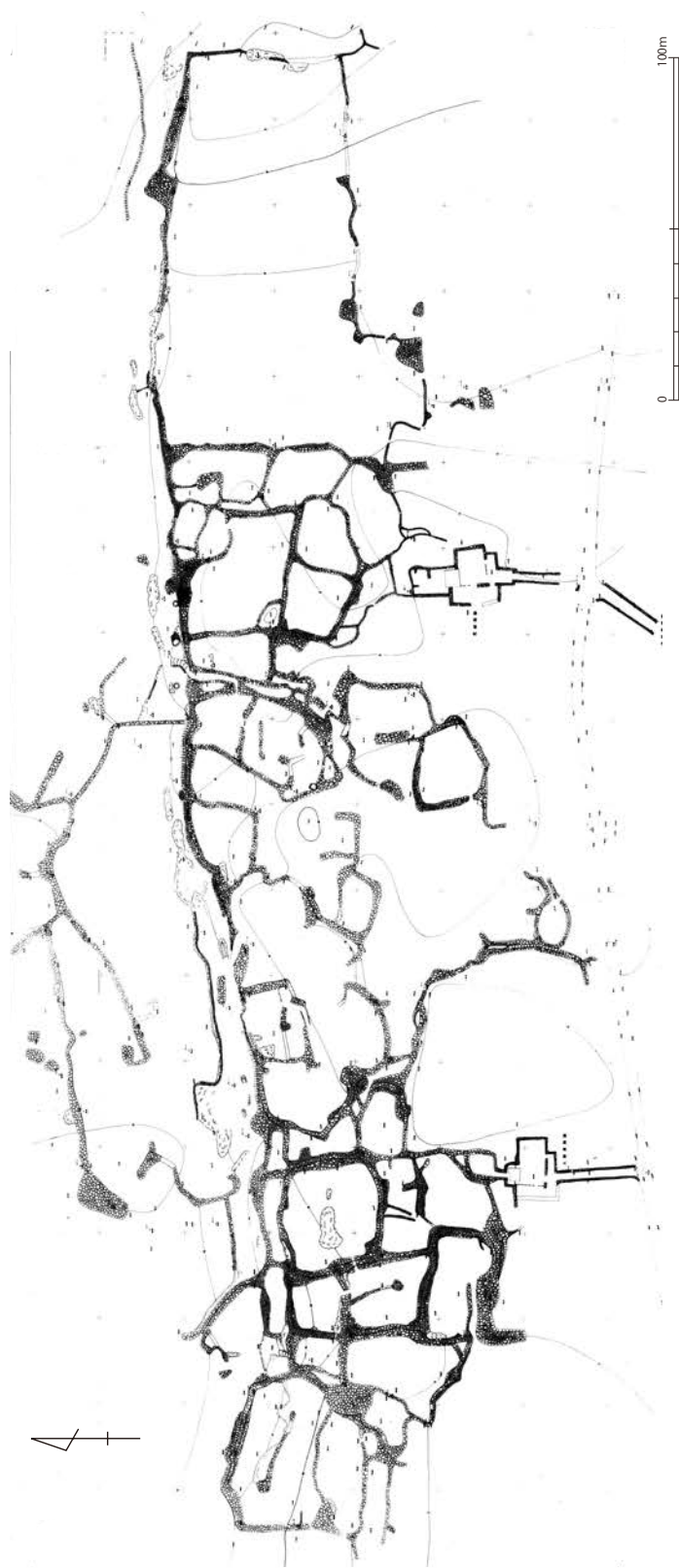


図4 竹富島・花城村跡遺跡測量図

況が確認された。東側の石積みは地山近くに大きな石を据え、高さ約 2.5 m、幅約 2.1 m と想定される規模の石積みを行なっている。南側の石積みは崩れが激しいが、残存高で 1.9 m、想定幅は 3 m 程度である。この石積みは地山ではなくその上に形成された貝層の上から積まれている。このことから、6 号屋敷を囲む石積みがまず作られ、その後西隣に 5 号屋敷が作られた。5 号屋敷は 6 号屋敷の石積みを見張りとして利用し、南側石積みは新たに積んで屋敷を囲ったということがわかる。このようにして屋敷を増殖して集落全体が広がっていったのだろう。そして、もともとは別の集落であった久間原村と花城村は最終的につながったのだと考えられる。本稿では、こういった集落を「細胞状集落」と呼ぶこととする。

出土した遺物のなかで最も多いのは在地産の土器で、とくに鍋形が主体をなす。ほかには、中国産の青磁、白磁、染付、褐釉陶器、天目碗、鉄製品や貝製品が挙げられている。青磁は碗を主とし、皿、盤が出ている。無文外反碗（D 類）が多く、蓮弁文碗（B 類）、細線蓮弁文碗（B4 類）、雷文帯碗（C2 類）が 1 から数点と、稜花皿が出土している。白磁は碗と皿で、外反口縁の碗が主で、ピロースクタイプの碗がわずかに含まれる。また挟み高台の小皿（B 群）もあるとされる。ピロースクタイプの碗というのがピロースクⅠまたはⅡ類で、外反口縁碗とはピロースクⅢ類を指すのであろうか。染付は玉取獅子の小皿（B1 類）1 点のみである。正式な報告書が出ておらず詳細は不明だが、古いものは 13 世紀後半～14 世紀前半、新しいものは 15 世紀後半～16 世紀前半の資料が見られるが、14 世紀後半から 15 世紀代の資料が主体であり、集落のおおよその年代が知られる。

花城村跡遺跡の外からは、現在 2 つの御嶽が向いている。東の花城御嶽と西の久間原御嶽である。それらの向かう先には遺跡のなかで最大の区画である屋敷 30 と屋敷 10 が位置する。この屋敷 30、屋敷 10 の周りには中小区画が附属して、約 50 × 60 m の方形ブロックを形成している。そしてこの方形ブロックを核として、さらに屋敷区画が広がってできたのが花城村跡遺跡だとされる〔小野 1999〕。確かに発掘調査によって確認された屋敷 5 は、方形ブロックの一面をなす屋敷 6 から増殖して形成されていた。『琉球国由来記』によると、竹富島の御嶽では村立てをした 6 人の酋長を祀っており、花城御嶽には花城村のタカネトノ、久間原御嶽には久間原村の久間原ハツが祀られているとされる⁽³⁾。そもそも御嶽は琉球王府が八重山に侵攻して以降のものである。廃絶した集落に向かって設けられた御嶽は、村立ての祖先を拝するものであろう。その先にあるのが、集落の最初期につくられた中核となる屋敷であり、まさにタカネトノ、久間原ハツの屋敷と考えられるのである。500 年の時を経て記憶に残った遺跡について、小野氏の解釈は非常に魅力的である。

(2) 竹富島の集落遺跡

竹富島の規模の大きな細胞状集落としては、もうひとつ新里村遺跡を挙げることができる。新里村遺跡は竹富島の北側海岸沿いに位置し、東西約 500 m、南北約 100 m に展開する集落遺跡である。竹富島一周道路建設工事に伴い、1986 年に沖縄県教育委員会が発掘調査を実施した〔沖縄県教育委員会 1990b〕。また、1995 年に国立歴史民俗博物館は上述の共同研究において測量図を作成している（図 5）。ハナクンガー（花城井）と呼ばれる井戸を挟んで東側は標高 3 ～ 5 m ほど、西側は 5 ～ 9 m ほどの場所に広がっており、報告書ではそれぞれを新里村東遺跡、新里村西遺跡と分けている。西遺跡は細胞状の区画が明瞭に残っているが、東遺跡は判然としない。また、出土遺物から東遺跡は 12 ～ 13

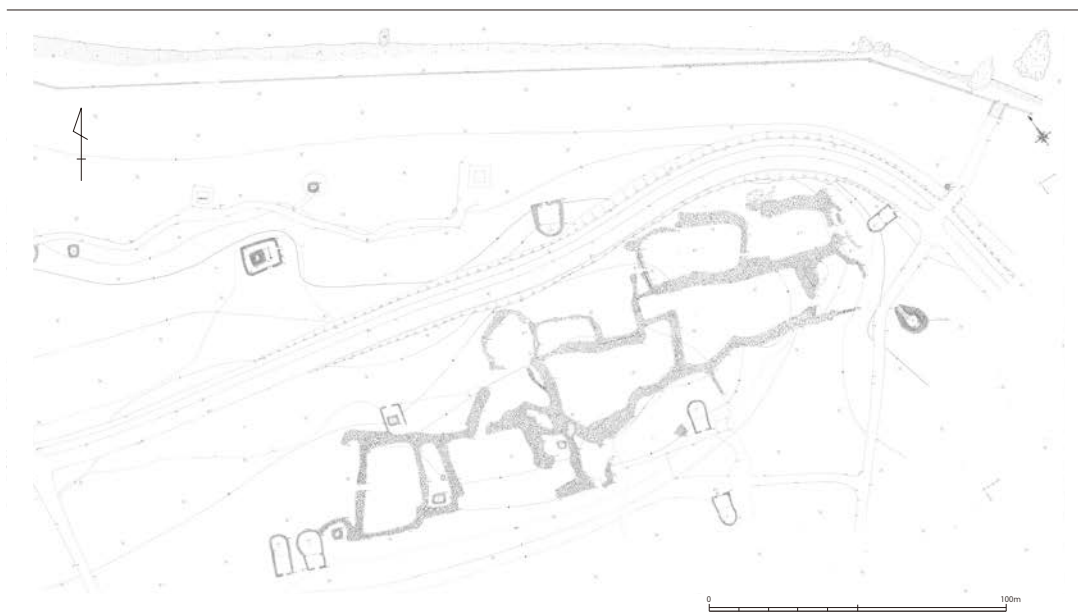


図5 竹富島・新里村遺跡測量図（西側）

世紀代で古く、西遺跡は14～15世紀代で新しいとして、時期の異なる集落跡と報告している。

東遺跡では、明確な石積みが確認されておらず、地山の上に石灰岩を野面積みした「土留め石積み」が見られたのみである。これが石積みの下部で、その上に積み上げられた石積みはすでに破壊されてしまった可能性も考えられる。地山面で2間×3間の掘立柱建物跡が1棟見つかった。西遺跡は、不整形な石積みによって囲われた区画が広がっており、発掘調査報告書では10の屋敷、グスク遺跡分布調査報告書では17の屋敷が想定されている。このうち1～4号屋敷が発掘調査された。1号・2号屋敷は海側の崖沿いに並ぶ区画で、南側の石積みが一連のものとなっている。通用門と考えられる石積みの途切れがあり、互いの屋敷地間も行き来できる。石積みの幅は約2mで、大きめの石灰岩で壁を作り、なかを拳～人頭大の小さめの石灰岩で充填している。石積みの高さは2～4段しか残っておらず、かなり破壊されている。1号・2号・4号屋敷の内部は柱穴群で占められており、掘立柱建物が何度も立替えられた様子が窺える。2号屋敷からは高倉と考えられる柱穴も検出されている。

遺物については、未報告資料も含めて中国産陶磁器の悉皆調査を実施した。詳細は次章で述べるが、東遺跡と西遺跡の遺物の年代差がそれほどはっきりとはせず、結論的には両者は同時併存した一体の集落と考えられそうである。12～13世紀は石積みがなく、14～15世紀になると石積み集落が現れる、といった流れを新里村遺跡から説明するのは困難と言わざるを得ない。もちろんこのことは、集落の石積みが12世紀代からあったということではなく、ある段階に加わった要素であることは、この後述べるフルスト原遺跡の2号屋敷跡などからも明らかである。なお、先に述べた花城村のタカネトノは新里村から移転してきたとの伝承が残っている。

竹富島の中心部に位置するフージャスクミ遺跡も、規模は小さいながらも不整形の石積み区画が細胞状に6区画ほど連なっている〔小野1998〕。丘陵の頂部を取り囲むような区画と、その周囲に展開する区画とからなるが、集落全体を防御するような断崖はみられない。集落域の端には井戸が1基残っている。フージャスクミ遺跡については1996年に国立歴史民俗博物館が測量図を作成している(図6)。



図6 竹富島・フージャヌクミ遺跡測量図

(3) 波照間島の集落遺跡

大規模な細胞状集落として、波照間島のマシユク村跡遺跡をみてみよう。1994年に国立歴史民俗博物館が測量図を作成している（図7）[金武2015]。マシユク村跡遺跡は、波照間島北側海岸沿いに面した琉球石灰岩の断崖上に位置する。崖の上にさらに野面積みで積み上げられた石積みは海側からも確認することができる。地元ではタカフクと呼ばれており、高い石垣を意味するという。遺跡はこの南側に、東西約300m、南北約150mの範囲に広がっている。現在は遺跡のなかを神道が貫いているが、これは集落が機能していた当時のものではない。図面から判断すると、全体で70区画ほどの石囲いを数えることができる。しかし、西側の整然とした方形区画は時期的には新しいものと考えられ、海の崖際まで迫った石積みから南側一帯に広がる不整形区画の集合体が、マシユク村跡遺跡の本体と思われる。陶磁器や食物残渣の貝殻なども、この辺りで採集できる。図面を手掛かりに現地を踏査すると、石積みには大小があり、屋敷囲いのほか、屋敷の内部を区切るようなものも見受けられる。石積みは崩れている箇所も多いため区画数を特定することはできないが、20区画程度は確認できる。残りのよい箇所では、隣接する区画とは幅1m弱の出入口によって結ばれている。

発掘調査はおこなわれていないが、沖縄県教育委員会によるグスク分布調査の際に、陶磁器などが採集されている[沖縄県教育委員会1994]。遺物は、青磁・白磁・褐釉陶器、在地産土器が主体で、染付はほとんどないという。報告書に掲載されている青磁・白磁12点のうちわけは、青磁碗D1類4点、D2類1点、B3類1点、B4類4点、稜花皿1点、白磁碗ビロースクⅢ類1点、皿B群1点で、14世紀後半～16世紀前半に収まる[池谷・小野ほか2021]。

波照間島にはほかにも北海岸沿いに細胞状集落が2か所確認できる。マシユク村跡遺跡の南西



図7 波照間島・マシュク村跡遺跡測量図

300 m 程に位置するのが、ブリブチ遺跡である〔沖縄県教育委員会 1994〕（図 8）。下田原城跡として国史跡に指定されているが、沖縄本島にあるようなグスクではなく、集落遺跡である。現在確認できる石囲いは 10 区画に満たないが、断崖上に琉球石灰岩を野面積みして不整形区画を細胞状に連結させている。それぞれの区画は石積みの途切れた出入口でつながっている。

波照間島北海岸の西方、ニシ浜（北浜）に面した密林のなかに残るのがミシュク村跡遺跡である。やはり不整形の石積み区画が広がることから、共同研究〔国立歴史民俗博物館共同研究「中世東アジア海域における琉球の動態に関する総合的研究」2015～2017 年度〕において測量調査を実施した（図 9）。詳細は調査報告〔佐々木・小出ほか 2021〕に譲るが、細胞状につながる不整形石積み区画が 10 数区画確認できた。採集できた陶磁器は 15 世紀代のものである。また、ジョージ・H・カー氏が 1960～62 年にかけてミシュク村跡遺跡を調査した際の採集資料を、沖縄県立博物館・美術館が所蔵している。これら 174 点について調査したところ、14 世紀後半～16 世紀前半に収まるものがほとんどであった〔池谷・小野ほか 2021〕。

（4）石垣島・フルスト原遺跡

石垣島の大浜に残るフルスト原遺跡は、石垣市教育委員会によって数度にわたり発掘調査がおこなわれている〔石垣市教育委員会 1984, 下地 1999〕（図 10）。南北に走る琉球石灰岩の台地上に石を積

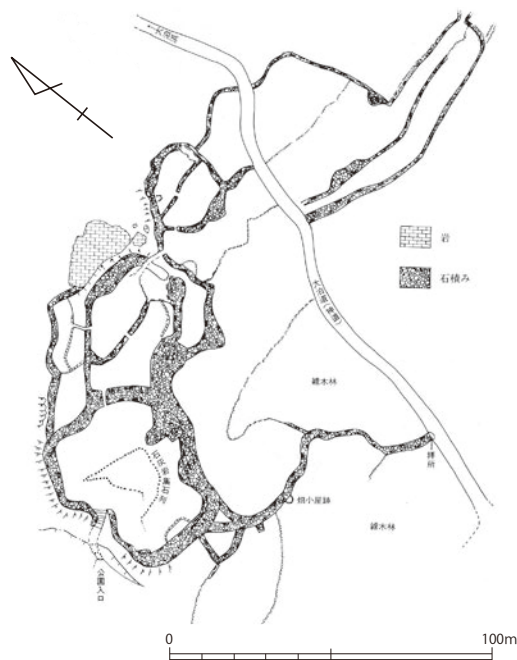


図8 波照間島・ブリブチ遺跡概要図
〔沖縄県教育委員会1994より〕

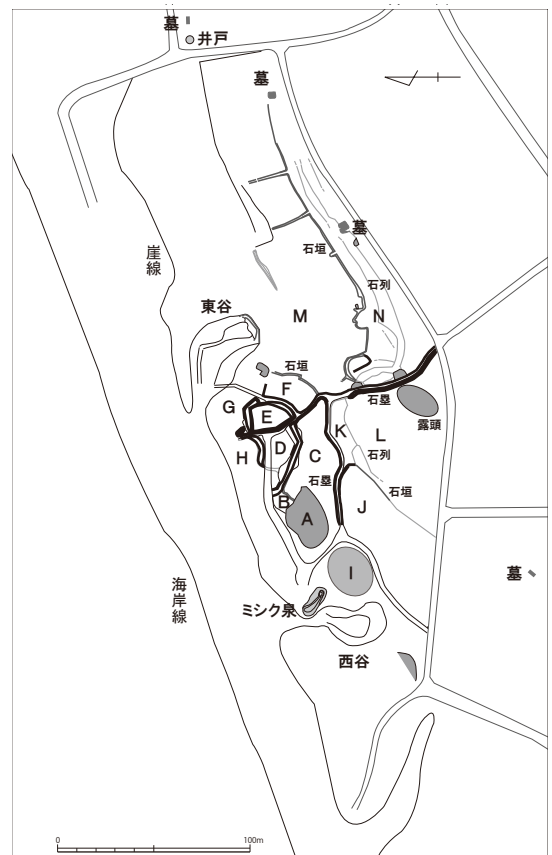


図9 波照間島・ミシュク村跡遺跡模式図

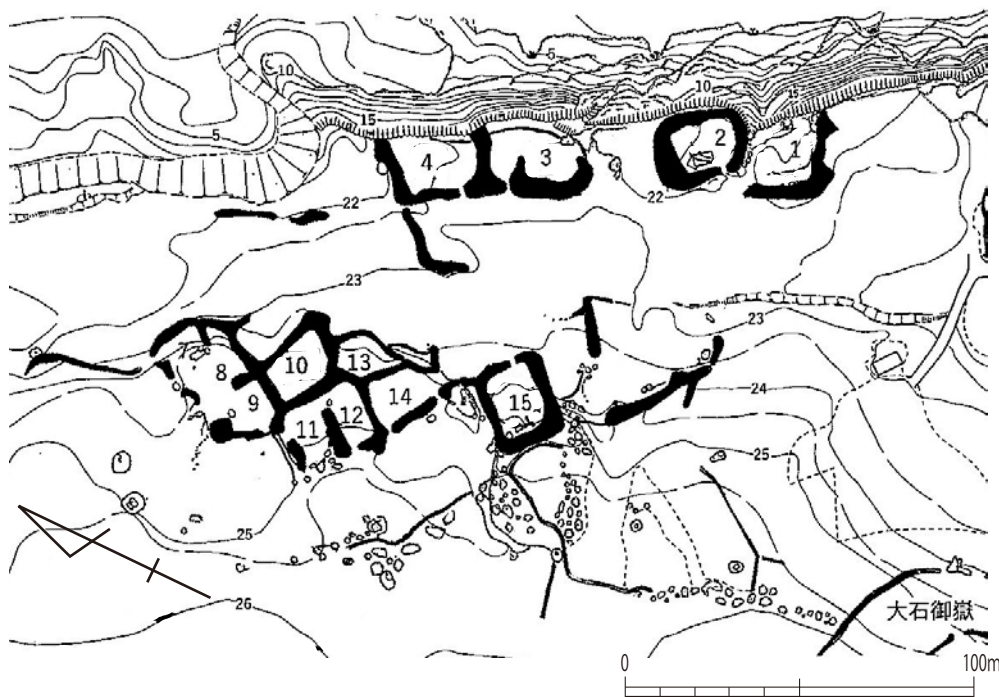


図10 石垣島・フルスト原遺跡模式図 [小野2020より]

み上げて囲んだ集落で、遺跡の東側は約15mの断崖である。遺跡の規模は南北約900m、東西約200mであるが、細胞状集落が広がる範囲は、南北約400m、東西約100mの間で、石積みで囲われた屋敷は15区画が確認されている。しかし中央部は太平洋戦争に際して飛行機の誘導路をつくるために破壊されており、本来はこの箇所にも石積みが広がっていたと思われる。往時はかなり大規模な集落であったようだ。

崖沿いの東側にある1～4号、および5号屋敷⁽⁴⁾と、西側の10号・15号屋敷が発掘調査されている。以下、下地傑氏の報告から概観しておく[下地1999]。1号・2号屋敷内はいずれも約250㎡で、石積みの幅は約2m、約4mである。石畳内には柱穴が多数残り、数次にわたって建物を立替え長期間利用されたことがわかる。残りがよいのは2号屋敷で、炉跡を円形状に囲むように柱穴群が検出されている。小野正敏氏によると、炉は東西方向を長軸としており、方位にあった建物が柱穴から復元できる。またこれとは別に、方位ではなく崖線に規定された石積みの方向に合わせた建物もまた柱穴から復元でき、その中柱が炉を切っている。すなわち、2時期の建物が復元でき、前期は石積みを見捨てた方位軸、後期は石積みに沿った軸をもつことから、前期は石積みになかったころの建物と考えられるという[小野2001]。5号屋敷は約600㎡と最大規模で、石積みの厚い部分は幅2.5mほどあり、15号屋敷は23m×20mの方形石囲いで、根石部分の石積みの幅は約1.8mである。

フルスト原遺跡はオヤケアカハチが拠点とした集落と考えられている。1500年に起こったオヤケアカハチの乱では、「⁽⁵⁾ 險阻を背負い、大海に面して陣を布いた」ため、王府軍は攻めあぐねたとされる。断崖の上に石積みを見守らせたフルスト原遺跡は、まさにそういった防御性を兼ね備えた集落遺跡である。

遺物については、未報告資料も含めて中国産陶磁器の悉皆調査を実施した。詳細は次章で述べる。

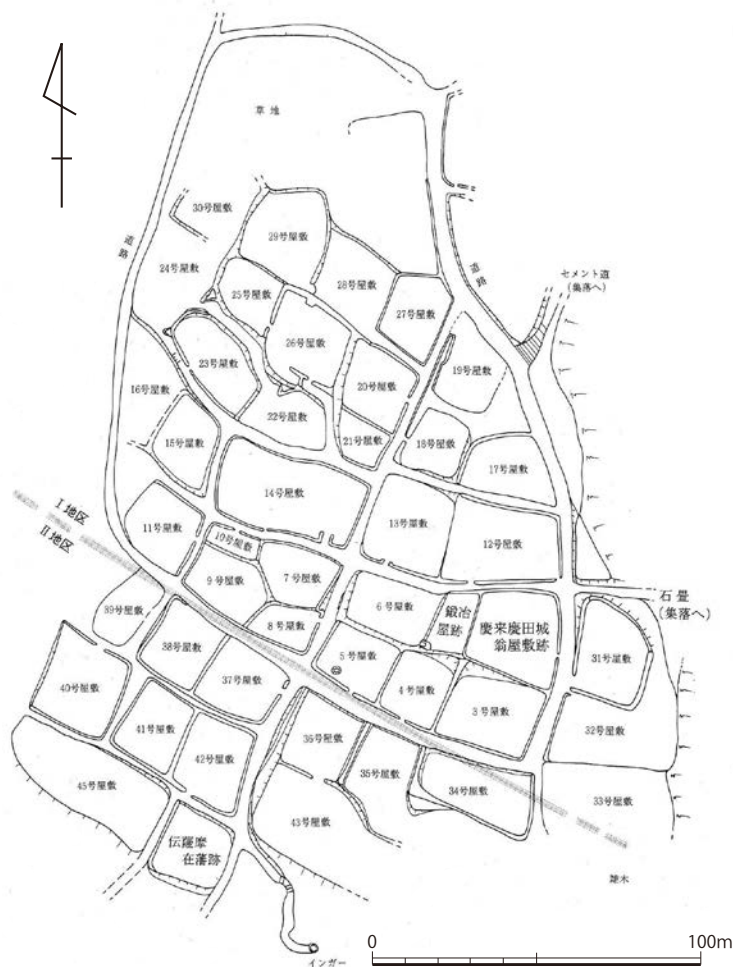


図12 西表島・慶来慶田城遺跡概要図 [沖縄県教育委員会1997より]

(6) 宮古の集落遺跡

八重山だけではなく、宮古にも細胞状集落跡が見られる。オイオキ原遺跡は、宮古島の北側（北東側）海岸沿いの琉球石灰岩丘陵上に位置する。グスク分布調査報告書（Ⅱ）によると、上坦部だけでも東西 100 m × 南北 30 m の広さがあり、野面積みの石囲いが巡っているという [沖縄県教育委員会 1990a]（図 13）。内部は平坦面ごとに石積みをして区画しており、不定形の小さな石囲いが連なる。南側の丘陵緩斜面部にも石積みは広がっている。「沖縄本島及びその周辺離島において見られるグスク遺跡に類似するものがある」とされるが、規模や形態からはむしろこれまで見てきた細胞状集落に類するものと考えられる。

箕島遺跡は、宮古島の南側の集落遺跡で、南北に走る丘陵上に位置する [沖縄県教育委員会 1990a]。丘陵の南端は海岸に達して切り立った断崖になっているほか、東側も崖が迫り、西側には緩斜面が広がる。グスク分布調査の際に遺跡全体の測量図を作成したほか（図 14）、部分的にトレンチ調査を実施している。遺跡の範囲は東西約 70 m × 南北約 350 m で、周囲を野面積みの石積みが囲む。東側は琉球石灰岩の露頭が多く、石積みはその間隙を埋める形で巡っている。内部も石積みで区画さ

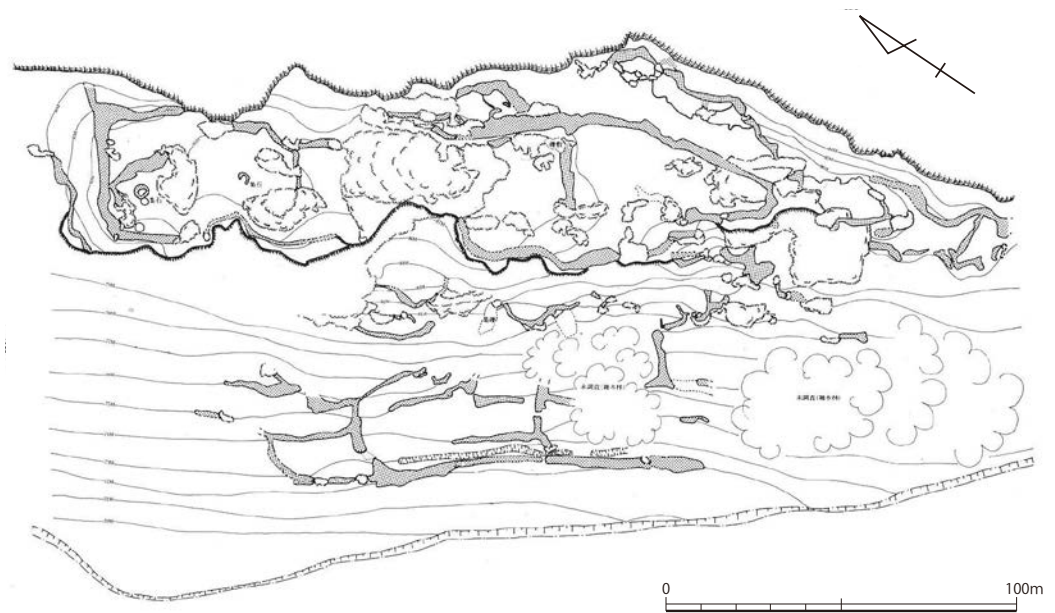


図13 宮古島・オイオキ原遺跡 [沖縄県教育委員会1994より]



図14 宮古島・箕島遺跡 [沖縄県教育委員会1994より]

れるが、南側の区画単位は小さい。これはそれぞれの区画を平坦面ごとに形成しており、南側は斜面地のためとする。それぞれの区画は石積みが途切れた出入口によって行き来できる。出土遺物や採集遺物からは、14～15世紀代の年代が与えられている。

^{ういびやーやま}
上比屋山遺跡は宮古島の南側の集落遺跡で、南北に延びる琉球石灰岩の丘陵斜面に位置する〔沖縄県教育委員会 1990a, 山本 2019〕（図 15）。現在は聖地とされ、遺跡内には9か所に拝所が存在する。また遺跡の北端には6m×3.5mの切石積みの方形石組遺構があり、近世の遠見台と考えられている。遺跡内には各所に野面積みの石積みが残っており、不整形の石囲いをなすものもある。遺跡内を走る通路は後世のもので、本来は石積みの一部を切った出入口を通して集落内を行き交ったものと思われる。1957年に試掘調査がおこなわれ、青磁や褐釉陶器などが出土している。青磁については元明時代の龍泉窯産と報告されている〔稲村 1957〕。

宮古島の北方に浮かぶ池間島にも、細胞状集落遺跡がある。海に突き出した丘陵上に営まれた^{いーばる}上原遺跡で、東、南、西の三方は海や崖で断絶している。遺跡を踏査して平面概要図を作成した山本正昭氏によると、石積み囲いが41か所あり、石積みの高さも最高所では2.5mを測るという〔山本 2004〕（図 16）。集落は3つのブロックに分けられるようで、とくに南のブロックは大正年間まで使われていたという話もあり時期差が見られる。このなかで北西のブロックが細胞状集落としての特徴を有している。集落内に通路はなく、不整形の石積み区画が接続しており、15世紀代の遺物が表採できるという。

（7）先島の非細胞状集落

一方で、細胞状に展開しない石積み集落もある〔沖縄県教育委員会 1990a〕。宮古島の手真嘉城跡は、一辺約75m×90mに延びる菱形状の石積みで囲われている（図 17）。現在は高さ1m程度だが、大正年間には2m前後の高さがあったという。同じく宮古島の久場嘉城跡も、約53m×65mの長方形の単郭石囲いであり、事例は少ないものの地域性を示すのかもしれない〔本村 2007〕（図 18）。

黒島のウブスク遺跡は低い琉球石灰岩の独立丘上に立地しており、石灰岩の端に沿って高さ約

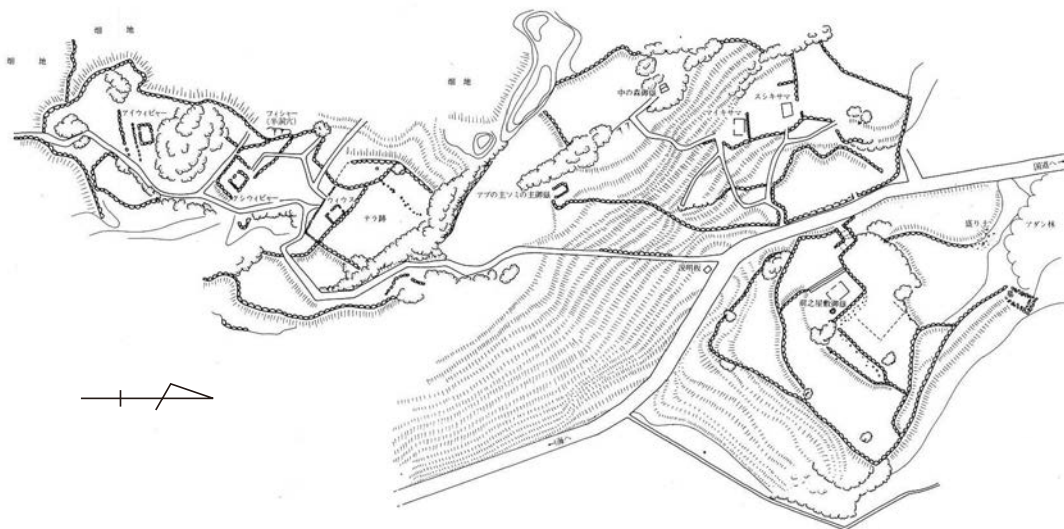


図15 宮古島・上比屋山遺跡〔沖縄県教育委員会1994より〕

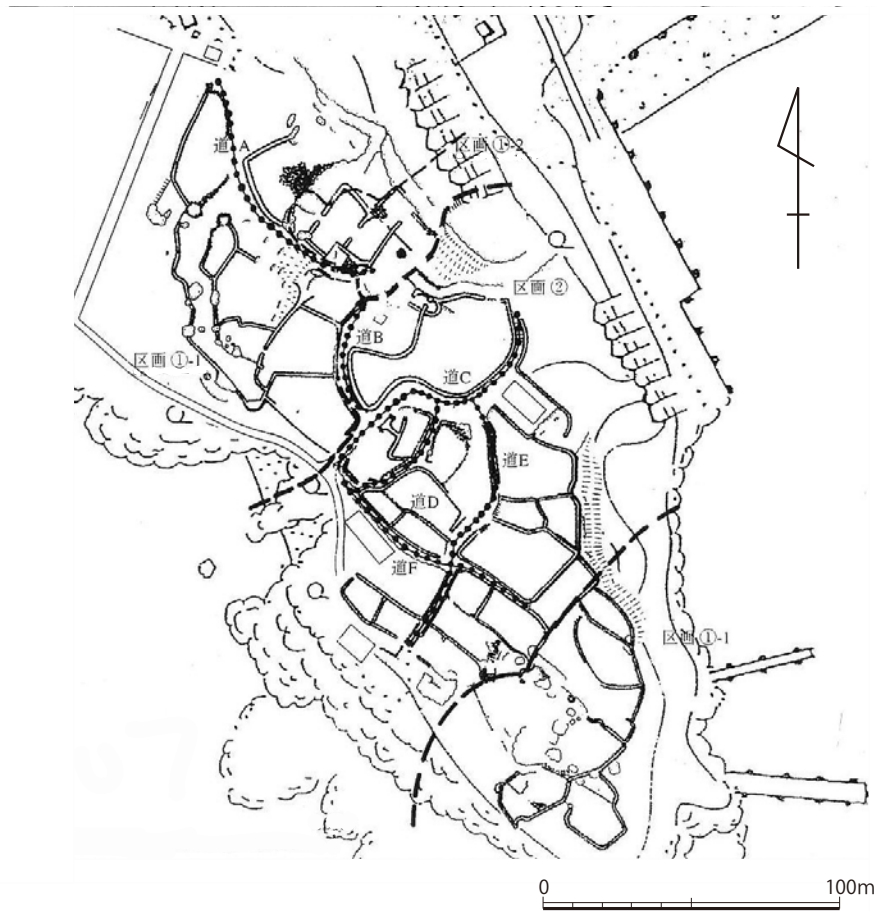


図16 池間島・上原遺跡概要図 [山本2004より]

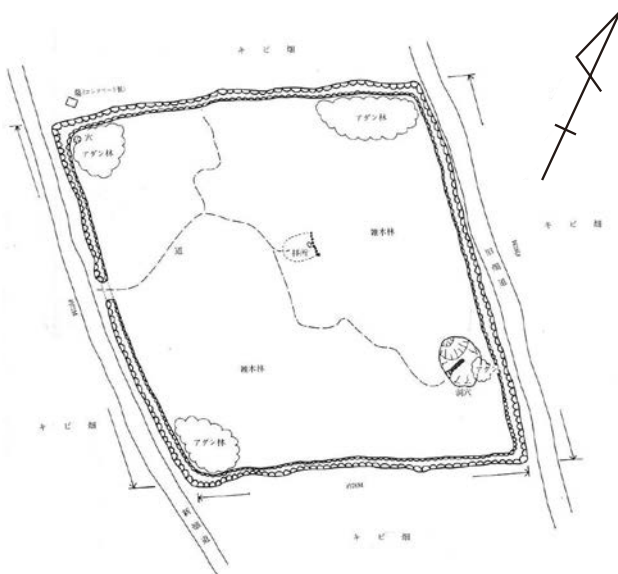


図17 宮古島・手真嘉城跡概要図 [沖縄県教育委員会1994より]

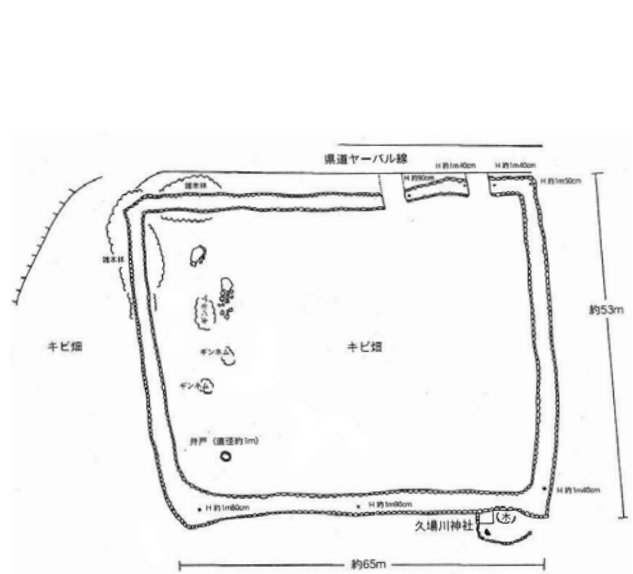


図18 宮古島・久場嘉城跡概要図 [本村2007より]

3 m の石積みを円形に巡らせている。長軸約 30 m × 短軸約 20 m でやや楕円形を呈する単郭となる（図 19）。アラスク遺跡も同様に、円形に近い一辺約 30 m の隅丸方形の石囲いをもつ（図 20）。ザンドウ遺跡、フカスク遺跡、ヴウスク遺跡なども円形状の単郭石囲いであり、黒島に特徴的な地域性を示す可能性がある。

このように、先島で見られる石囲い集落遺跡からは、島ごとの地域性をもつ一方で、先島一帯に共通する集落形態が存在したことがうかがえよう。これらは沖縄本島では見られない要素であり、先島独自の文化圏を象徴する遺跡と位置づけることができる。

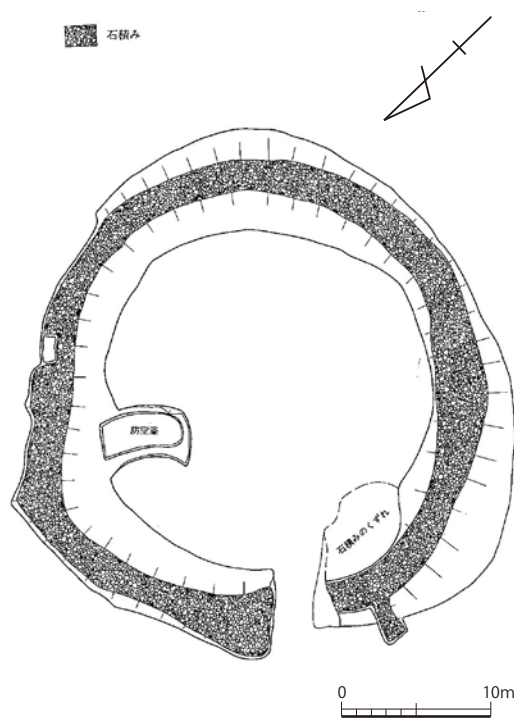


図19 黒島・ウブスク遺跡概要図
〔沖縄県教育委員会1994より〕



図20 黒島・アラスク遺跡概要図
〔沖縄県教育委員会1994より〕

③……………陶磁器からみた先島の集落

(1) 陶磁器全点カウント調査と時期設定

これまで見てきた集落遺跡の時期を決めるのは、出土遺物である。先島では沖縄本島と同様に、膨大な量の中国産陶磁器が出土する。本来なら在地産の土器を含めた遺物総体から遺跡の性格や年代を決めていくのが常套であるが、他地域との比較も可能な中国産陶磁器だけでも十分な量が見込まれるため、発掘調査が実施された良好な遺跡の青磁・白磁・染付を中心に分析することとする。

先島の集落遺跡として、宮古島の住屋遺跡、ミヌズマ遺跡、竹富島の新里村遺跡、石垣島のフルスト原遺跡の出土陶磁器を調査した。また比較対象として、沖縄本島を挟んで北側の奄美を検討す

ることにし、喜界島の城久遺跡群大ウフ遺跡、手久津久遺跡群中増遺跡から出土した中国産青磁・白磁・染付の全点調査をおこなった。

これに際して、調査先各機関の協力のもと、報告書未掲載の破片も含めて、全点の分類・カウント調査を実施させていただいた。以下の数値はそれに基づくものである〔池谷・小野ほか2021〕。なお、時期については次のような区分をおこなっており、以下それを用いて進めることとする。陶磁器分類の詳細については、同論考を参照されたい。

時期区分、世紀、指標とする主な分類

I 期（11 世紀後半～12 世紀中頃）青磁碗 A0，白磁碗Ⅳなど

II 期（12 世紀後半～13 世紀前半）青磁碗 A1～6，同安窯系，白磁碗Ⅴ～Ⅷなど

III 期（13 世紀後半～14 世紀前半）青磁碗 B1，白磁Ⅸ，浦口窯系，ビロースクⅠ・Ⅱなど

IV a 期（14 世紀後半～15 世紀初頭）青磁碗 B2・D1，ビロースクⅢなど

IV b 期（15 世紀前半～15 世紀中葉）青磁碗 B3・C2・D2，内彎系Ⅲ，白磁Ⅲ B，染付碗 B など

V 期（15 世紀後半～16 世紀前半）青磁碗 B4・E，端反Ⅲ，稜花Ⅲ，白磁Ⅲ C・E，小杯，染付碗 C，Ⅲ B1・C など

VI 期（16 世紀中葉～16 世紀末期）青磁菊Ⅲ，染付碗 E，Ⅲ B2・E・F，染付漳州窯系など

表2 先島・奄美の集落遺跡出土陶磁器主要組成の変遷

	種類	白磁	白磁	白磁	青磁	白磁	白磁	白磁	青磁	青磁	青磁	青磁	青磁	青磁	染付
	型式	碗Ⅳ	碗Ⅴ	皿Ⅸ	碗B 1	浦口	ヒロⅡ	ヒロⅢ	碗D 1	碗D 2	碗C 2	碗B 4	稜花Ⅲ	碗E	
	時期	I	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅳ a	Ⅳ a	Ⅳ b	Ⅳ b	V	V	V - Ⅵ	V - Ⅵ
		11 後～ 13 前		13 後～ 14 前				14 後～ 15 初		15 前～ 15 中		15 後～ 16 前		15 後～ 16 末	
宮古島	住屋	(△)		(△)	(△)	○	○	△	○	◎◎	○	◎◎	◎	◎	◎
	ミスズマ	○	(△)	(△)	(△)	◎	◎	○	◎◎				(△)		
竹富島	新里村	△	(△)	(△)		○	◎	○	◎	○	(△)		(△)	(△)	
石垣島	フルスト原			(△)	△	○	○	○	◎	○	○	◎	○	○	△
喜界島	大ウフ	◎	○	△	○			○	◎	△	(△)	△	(△)	(△)	(△)
	中増							○	◎	○	○	(△)		(△)	

陶磁器量：(△) 僅か、△少し、○ある、◎多い、◎◎非常に多い

(2) 宮古島の集落遺跡出土陶磁器

住屋遺跡は宮古島北部、漲水港近くに位置する集落遺跡で、現在は宮古島市役所が存するように、長らく宮古島の中心として栄えてきた場所である。付近には近世になって仲宗根豊見親の墓がつくられており、琉球王府に与して宮古島を支配した仲宗根豊見親の本拠地と考えられている。

陶磁器調査では未報告資料も含めて、青磁 8,338 点、白磁 1,323 点、染付 881 点、合計 10,542 点をカウントした。浦口窯系（140 点）、ビロースクⅡ（118 点）といった白磁碗がまとまった量見られ、Ⅲ期から遺物量が増える。とくに青磁碗 D2（1,360 点）、B4（1,013 点）はそれぞれ 1,000 点以上数えられ、IV b 期から V 期にかけてがピークとなる。その後も、稜花Ⅲ（307 点）をはじめ、青磁碗 E（427 点）、染付（881 点）も一定量出土しており、近世にかけて遺跡は継続していく。

仲宗根豊見親の本拠というにふさわしく、琉球王府の支配以降も廃絶せずに宮古の中心であり続

けた様子が遺物からも確認できる。

しかし宮古の集落には、中世段階で廃絶するものも多い。その代表としてミヌズマ遺跡を取り上げる。ミヌズマ遺跡は宮古島西部、海岸付近に位置する。サトウキビ畑の圃場整備にあたり発掘調査された遺跡で、掘立柱建物跡などが確認された集落遺跡である。

青磁705点、白磁612点、染付0点、合計1,317点をカウントした。白磁碗Ⅳ（29点）がある程度入っており12世紀代にも何らかの活動痕跡があるが、浦口窯系（125点）、ビロースクⅡ（290点）の白磁碗が大量に出てくるⅢ期に本格的な活動が始まるようである。青磁の大半を占める碗D1（660点）が最も多く、このⅣa期が遺跡のピークである。しかしここをもって劇的に遺物が見られなくなり、突然遺跡が廃絶したことがわかる。

青磁碗D1の年代観によって多少前後するが、15世紀前半で廃絶する遺跡は高腰城跡、野城遺跡、久場嘉城跡など「高腰タイプ」として宮古島で複数確認されており、この時期に大きな変動があったことが想定される〔久貝2014〕。先に見た住屋遺跡とは対照的で、伝承がいうところの宮古島全島を巻き込んだ「与那覇原戦争」〔慶世村2008〕、あるいは琉球王府による侵攻をこの時期に想定するのが妥当であろう。

（3）八重山の集落遺跡出土陶磁器

竹富島の新里村遺跡は、井戸を挟んで西村と東村に分かれると認識されており、発掘調査報告書では石囲いをもたない東村が古く、細胞状集落である西村が新しいとされる。しかし陶磁器を全点カウントした限り、それほど大きな差は見られなかった。そのため、ここでは一体のものとして捉えることとする。

青磁736点（西村576点、東村148点、不明12点。以下同様に記す）、白磁288点（207点、77点、4点）、染付0点、合計1,024点（783点、225点、16点）をカウントした。白磁Ⅳが西村から7点、東村から5点、地点不明が1点と、確かにⅠ期にさかのぼる古手の白磁も見られるが、その数はわずかである。浦口窯系（17点、20点、1点）、さらにビロースクⅡ（106点、23点、1点）の白磁碗がかなりの量入っており、Ⅲ期から集落としての本格的な展開が見込まれる。最も多いのは青磁碗D1（281点、77点、4点）で半数近くを占めており、Ⅳa期が集落の最盛期と言えよう。しかし、Ⅳb期の青磁碗D2（67点、6点、0点）段階になると減少し、Ⅴ期の陶磁器はほとんど出土していない。このころをもって集落が廃絶したと考えられる。

伝承では、新里村は花城村へ移転したになっている。花城村跡遺跡でも一部発掘調査がおこなわれているが、そこから出土する陶磁器は14～15世紀のものとされており〔仲盛1999〕、遺物から見る限りは、両村は併存していたことになる。

石垣島のフルスト原遺跡は、細胞状集落の典型例である。太平洋戦争の際に軍事利用でかなり破壊されており、現在は15区画の石囲い屋敷が残るに過ぎない。このうち、1～5、10、15号屋敷について発掘調査を実施しており、2号屋敷内からは2時期にわたる掘立柱建物と炉跡が見つかった。しかし層位を意識した遺物の取り上げは困難だったようで、それぞれの時期を示すことはできていない。陶磁器調査は石囲いごとにおこなっているが、その詳細は調査報告に譲り〔池谷・小野ほか2021〕、ここでは遺跡全体の総数のみから論じる。

青磁 7,556 点、白磁 1,323 点、染付 17 点、合計 8,896 点をカウントした。白磁ⅣのようなⅠ期の資料は皆無で、Ⅱ期も青磁碗 A2 (7 点) がやや加わる程度である。やはり資料が増加するのはⅢ期になってからである。白磁皿Ⅸ (27 点)、青磁碗 B1 (15 点) も多少あるが、主体となるのは浦口窯系 (184 点)、ビロースクⅡ (404 点)⁽⁶⁾ といった白磁碗である。上述してきた 3 遺跡と同様で、とくにビロースクⅡの量は目立つ。最も多いのはⅣ a 期の青磁碗 D1 (1,639 点) であるが、Ⅳ b 期の青磁碗 D2 (470 点)・C2 (317 点)、Ⅴ期の青磁碗 B4 (740 点)・E (486 点)、稜花皿 (189 点) も相当量含まれており、15 世紀代を通じて集落が栄えた様子が想像できる。しかし染付はほとんど入っておらず、16 世紀の早い段階には集落は廃絶していたと考えられる。

フルスト原遺跡はオヤケアカハチの本拠地と考えられている。そうだとすれば、1500 年に起こったとされるアカハチの乱によって集落が廃絶した可能性が高く、遺物からはアカハチの本拠説を支持するデータが得られたことになる。

以上のように、先島ではⅢ期に浦口窯系およびビロースクⅡの白磁碗が急増し、集落の姿が明らかとなる。近世まで継続する住屋遺跡は、Ⅳ b・Ⅴ期をピークにさらに繁栄し続けるが、宮古島のミヌズマ遺跡は最盛期のⅣ a 期をもって突如、八重山の新里村遺跡はⅣ a 期をピークにⅣ b 期には減少し、集落は廃絶した。フルスト原遺跡はⅤ期まで存続するものの、そのなかのいずれかの時期に、やはり遺跡は断絶してしまう。住屋遺跡を除き、13 世紀後半に現れた集落は 15 世紀から 16 世紀初頭段階にいずれも終焉を迎えた。そして、その時期は宮古の方がやや早いということになる。

(4) 奄美の集落遺跡出土陶磁器

次にこれらと比較するため、奄美の集落遺跡を見ておきたい。喜界島の中央に位置する城久遺跡群は、古代にさかのぼる集落遺跡で 12 世紀代に繁栄した。そのなかでもやや低い地点にあるのが大ウフ遺跡である。

大ウフ遺跡の陶磁器は、青磁 470 点、白磁 308 点、染付 5 点、合計 783 点をカウントした。白磁碗Ⅳ (76 点)・Ⅴ (24 点) が 100 点ばかり出土しており、城久遺跡群全体の最盛期であるⅠ期において、既に集落として機能していたことがわかる。Ⅲ期になると青磁碗 B1 (29 点) と少量の白磁皿Ⅸ (6 点) があり、Ⅳ a 期に入ると青磁碗 D1 (97 点) と白磁碗ビロースクⅢ (16 点) によって遺物量は一気に増加する。しかし、その後続くⅣ b 期の青磁碗 D2 (8 点)・C2 (2 点) やⅤ期の青磁碗 B4 (8 点)・E (4 点)、稜花皿 (2 点) はほとんど見られない。Ⅰ期の繁栄のあとやや低調になり、Ⅳ a 期に再び盛期を迎えるものの、短期間で集落としての機能を停止したようである。

中増遺跡は、喜界島南西部の海岸寄りに位置する手久津久遺跡群の一画で、標高 20 m 前後の海岸段丘上に立地する。15 棟の掘立柱建物跡が見つかっており、それらを囲繞するように幅 2 m ほどの溝が崖際に掘られている。

陶磁器は、青磁 167 点、白磁 23 点、染付 0 点、合計 190 点をカウントした。Ⅰ～Ⅲ期の資料はほとんどなく、Ⅳ a 期になって白磁碗ビロースクⅢ (11 点) と青磁碗 D1 (24 点) がある程度見られるようになる。集落の成立はここであろう。青磁碗 D2 (37 点)、C2 (14 点) も一定程度出ているため、Ⅳ a、b 期がこの遺跡のピークとなる。しかし青磁碗 B4 (1 点) や E (3 点) はほとんどなく、稜花皿も染付も皆無であることから、ピーク時をもって集落は廃絶したと考えられる。

奄美地域の遺跡は2か所しか調査できていないが、IV a 期、IV b 期という15世紀代をもって終焉を迎えている。先島の調査例に比べると遺物量は少ないものの、いずれも最盛期にいきなり廃絶したような感を受けるもので、なんらかの劇的な要因が働いたことが予想される。また、Ⅲ期の資料は少量ではあったものの、青磁碗 B1 と白磁皿Ⅸで構成されている。先島地域では浦口窯系とビロースクⅡの白磁碗が主体であったこととは対照的で、すでに指摘されているように[木下編2009]、沖縄本島を挟んでこの時期の中国産陶磁器の流通のあり方が大きく異なることが明瞭である。

(5) 遺跡・遺物からみた先島の中世集落

花城村跡遺跡を代表として、先島では各地にこのような集落遺跡が残っており、小野正敏氏は次のようにまとめている。①集落内には道路がない。②石積みによる屋敷割りが方形ではなく、不整形な区画である。サイズもまちまちで不均質な屋敷が細胞群のように連結し、石積みの一部を狭く切った出入口によって屋敷から屋敷へと連続しているのが特徴。③集落内には現在知られているような御嶽がない[小野1999]。さらに④崖の上に大規模な石積みを設けて囲み、集落の防御性が強い[小野2020]。

これらの特徴は細胞状集落の最終段階における形態を示している。細胞状集落については当初から石積みが存在したわけではなく、そのプレ段階が想定できる。それは、フルスト原遺跡の2号屋敷でみつかった2時期の建物により証明できる。上述したように、石積みで囲われた区画内に石積みの壁面に沿った方位の建物が建てられる以前に、区画を無視した建物が存在していた。それは自然方位に沿ったもので、石積みがまだなかった段階の建物跡と考えてよかろう。明確な年代を押さえられないのが惜しいが、2号屋敷を含むフルスト原遺跡全体からは浦口窯系やビロースクタイプⅠ類といった白磁碗が多く出土しており、13世紀後半から14世紀前半には集落が成立していたことは明らかである。この時期から急激に遺物が増加するのは、同じく八重山の細胞状集落である新里村遺跡もそうであるし、また石積みを持たない宮古の住屋遺跡、ミスズマ遺跡でも同じである。先島では12世紀代の遺物も皆無ではないが、遺物総数から判断するとそうした古い陶磁器はわずかにすぎない。13世紀後半から14世紀前半のⅢ期こそが、先島一帯に集落が広がる大きな画期と言えよう。

細胞状集落は、花城村跡遺跡で見たように、村立て段階の中心部があり、そこを核として増殖して広がっていったと考えられる。そのため、集落全体を囲む崖際の大規模な石積みは、集落が最大規模に広がった後につくられたものでなければならない。防御性は後から備わった特徴となろう。そうすると、村立てに際して崖際に集落を設けたのは別の意図があったことになる。崖下あるいはその周辺には湧水地点が多く、花城村跡遺跡の4か所の井戸、新里村遺跡のハナクンガー（花城井）、ミシュク村跡遺跡のミシュクゲー（泉）など、むしろこちらの方が集落立地上の必要条件であろう。宮古島のオイオキ原遺跡や箕島遺跡は、本稿では細胞状集落の一例として取り上げた。しかし、これらは沖縄本島にあるような城塞的グスクと見られなくもない。細胞状集落の特徴は、いま述べたように中心部を核として増殖していき、最終的に周囲を囲む石積みができあがる。この集落の展開過程は石積みの成立順序を発掘調査によって確認することで示すことができる。全体を囲ったうえで、内側の平坦部を石積みで細分化していたとすれば、細胞状集落ではないことになろう。

今後調査されることがあれば、そういった点に注意を払って検討材料を増やしていきたい。

以上、遺跡と遺物の両面から検討してきたように、先島には沖縄本島には存在しない、石積みで囲われた集落遺跡が各地で見られる。なかでも、細胞状集落遺跡は石垣島・竹富島・波照間島・西表島といった八重山のほか、宮古島や池間島にも存在し、広域に分布する集落形態であることがわかる。とくに竹富島の花城村跡遺跡や新里村遺跡、石垣島のフルスト原遺跡、波照間島のマシユク村跡遺跡などは数十区画を有する大規模なものである。集落全体を囲う外郭線は琉球石灰岩の断崖上に積まれた高い石積みをもち、防御性を備えた集落と言える。これらの遺跡で見つかる中国産陶磁器によると、15世紀代の資料が多くその最盛期が知られるが、それ以後継続するものはほとんどなく、15世紀後半から16世紀初頭までには集落が廃絶していることがわかる。西表島の上村遺跡や、池間島の上原遺跡のように、新しい時期の陶磁器が見つかる場合も、それは隣接する整然とした別区画からであり、不整形の細胞状集落が16世紀段階には放棄されているのは同様である。

花城村跡遺跡で指摘されるように、村立ての人物の屋敷跡と考えられている屋敷区画は大きい。不整形な区画はそれぞれの大小差がはっきりしており、これは集落内での階層差を反映していると考えられる。中心部にある大きな区画と周辺部の小さな区画の発掘調査を実施することができれば、陶磁器の格差のような形で屋敷区画ごとの出土遺物の違いが現れるかもしれない。⁽⁷⁾不整形区画からなる細胞状集落には、そのなかに階層性をもつ社会があった。それが15世紀後半から16世紀初頭にかけて破壊され、社会が再編された。その要因として考えられるのが、琉球王府による先島侵攻というわけである。

④…………海上帝国琉球

(1) 尚泰久の梵鐘

第一尚氏第6代王の尚泰久は、志魯・布里の乱という王位争奪戦争の結果、王位についたため、王権は弱体化していた。その王権を支えるのは、舅・護佐丸と娘婿・阿麻和利で、治世半ばに起こった護佐丸・阿麻和利の乱は尚泰久に大いなる衝撃を与えた。そういった近親者たちの争乱を身近に経験したこともあり、多くの寺院を建立し梵鐘を鑄造して、深く仏教に帰依した。そのため、近世になって編纂された『中山世譜』や『球陽』には、「仏法之明君」と称されている。というのが一般的な見解であろう。

1454～60年の7年間という短い治世の間に、数々の寺院を建立し、23口もの梵鐘を鑄造するにはかなりの財力が必要である。また、2度の大乱で焼失した首里城の再建もおこなわねばならず、王権が弱体化してはこういった事業をなすことはできないはずである。また、護佐丸、阿麻和利をそれぞれ忠臣、逆臣とする語りは措くとして、中城城の護佐丸、勝連城の「肝高の」阿麻和利はいずれも強大な力をもった有力按司であり、結果的にこの両者が共倒れすることで王権は確固たるものとなった。穿った言い方をすれば、そのこと自体が結果論的な偶然の産物ではなく、尚泰久王による必然的な排除である可能性もある。

さて、尚泰久を「仏法之明君」と呼ばしめる証拠が、23口の梵鐘である。広厳寺・普門寺・天龍

寺といった自身が建立に携わった寺院を含め17か寺と、首里城正殿、魏古城（越來城）、一品権現御宝殿、天尊殿、上天妃宮、（下）天妃宮に及ぶ各所に掛けられた。銘文はいずれも相国寺僧溪隱安潜の作になり、首里城正殿鐘以外はほぼ同文の定型句が連なる。そのなかには「蛮夷不侵」といった中華思想的な文句が読み取れる〔上里2012〕。

注目したいのは、これらの梵鐘が天尊殿、上・下天妃宮にも掛けられたという事実である。銘文には「王大世主（尚泰久王）が新たに巨鐘（洪鐘）を鑄て、〇〇寺に寄捨す」と刻まれており、王から寺への寄進という体裁になっている。しかし、天尊殿や天妃宮は、福建系華人たちが信仰する道教の施設である。華人たちは漢文外交文書の作成能力や操船技術をもっており、海外交易に不可欠な人材であった。そのため、彼らは琉球王府の支配下ではなく一定の距離を置いた存在として那覇を拠点に活動していた。その信仰の要である堂舎に、尚泰久が建立した寺院などと同様に同じような銘文を刻んだ梵鐘を掛けるよう持ち込まれたのである。これは、不可侵であった華人勢力に対する介入と言えるのではなかろうか。尚泰久の仏教に対する信奉については、ここで論じる能力はない。ただ、実際に行われた政策を見る限りにおいては、この事態は華人勢力に対する王権の侵犯と捉えることができよう。

先にみた陶磁器の分析から、宮古島の集落であるミヌズマ遺跡は15世紀前半代に突如として消滅する。ほかにも同様の遺跡が高腰タイプとして複数挙げられており、宮古島においてこの時期に大きな画期が訪れたことが明らかである。また喜界島の集落でも中増遺跡が15世紀中葉にピークを迎えるにもかかわらずその後には続かず、やはりこの時期に消滅してしまう。陶磁器資料からはあまり短期間に時期を絞るのは難しいため、第一尚氏王朝のいずれかの時期に宮古島や喜界島で集落が消滅するような大きな動乱があった、と言うに留めざるをえない。しかし直接的な侵攻があったかどうかはともかくとして、これを琉球王府による何らかの影響と考えることは許されよう。尚泰久の時期に琉球王府の中央集権的志向が確認できるとすれば、周辺地域への圧力もその前後の時期も含めて同時併行的に進行していたと考えられる。

（2）尚真王の太平山征伐、そして「尚真帝王」

琉球王国最盛期を現出した、第二尚氏3代王・尚真の事績については、同時代資料に「百浦添之欄干之銘」がある。正徳4年（1509）という治世半ばでの功績であるが、造寺造仏や治国齐家、交易振興など9つの事績が顕彰されている。なかでも58字という最長字数で記されているのが、弘治庚申（1500年）春に「戦艦一百艘」を派遣して平らげた太平山征伐である。オヤケアカハチの乱については、このように同時代資料からも確認できる。これによって太平山は翌年から穀物・布・徭役を負担するようになり、王国は愈々もって繁栄したとある。やや時代は下るが、首里城の城壁の石垣工事の時には、奄美諸島や宮古・八重山の人びとも動員されている。⁽⁹⁾

このように尚真王の時期には版図を広げ、中央集権的な統治が強化されたわけである。「百浦添之欄干之銘」で第一に掲げられた事績は、仏教に帰依し造寺造仏を盛んにおこなったことである。実際に1494年に建立された王家の氏寺・円覚寺は、琉球最大の禅刹であった。円覚寺に掛けられた梵鐘⁽¹¹⁾としては、弘治9年（1496）に鑄造された楼鐘のほか、弘治八年銘の殿前鐘・殿中鐘の3鐘が存在する。殿前鐘は仏殿の右端に掛けられており、殿中鐘は仏殿の後方に建てられた龍淵殿という

尚氏累代の位牌が置かれた奥の院的な建物に掛けられていたという。尚氏の聖なる空間に掛けられた殿中鐘はやや小ぶりの梵鐘で、場所柄からも人目につきにくい存在かも知れない。しかしそこには、わざわざ矩形の枠を設けた箇所「尚真帝王」と金象嵌された銘文が刻まれているのである。清に冊封された王である以上、それをあからさまに称するわけにはいかず、また清の使節に見られることも避けたかったであろう。しかしその志は覆うべくもなく、太平山征伐より以前の段階で、すでに帝王としての心意気を吐露していたのではなかろうか。

八重山の集落遺跡が15世紀後半から16世紀初頭にかけて壊滅的な打撃を受けた様子は、先に集落遺跡と陶磁器による分析でみたとおりである。これが尚真王期の太平山征伐によるものであり、それはオヤケアカハチが割拠していた石垣島だけでなく八重山全体に大きな変化を及ぼした。一方で、琉球王府の尖兵となった仲宗根豊見親の本拠と考えられている宮古島の住屋遺跡は、15世紀前半から中葉の宮古動乱、16世紀初頭の太平山征伐の影響もなく存続している。琉球が周辺地域を支配下におさめていく過程で、それぞれの在地既存の社会は解体、再編され、琉球帝国のなかに組み込まれていったのである。

おわりに

琉球王国は内政的に王権を安定させるとともに、周辺の島々を併呑していった。その過程で、宮古や八重山、奄美は、生活・文化を変容させていった。考古学的には、集落の廃絶・移転という形でその影響を捉えることができる。陶磁器の分析からは、宮古島の集落は15世紀前半、喜界島の集落は15世紀半ばに消滅するものがみられ、八重山では少し遅れて15世紀末から16世紀初頭にそういった現象がみられる。それによって、八重山に広くみられたこの地域に独特の構造をもつ細胞状集落遺跡は壊滅してしまう。琉球は独自の文化をもった周辺地域を配下におさめ、帝国として内国化していったのである。すなわち、15世紀前半から半ば頃に琉球帝国膨張の第一波により奄美・宮古を、15世紀末から16世紀初頭の第二波によって八重山を帝国に組み込んだ。第一の波を尚泰久王の時代と短期間に限定して考える必要はなく、そういった現象は時間幅をもって捉えるべきであろう。第二の波については、その統治期間の長さもあって尚真王の時代と考えてよい。

文献史学の成果からは、16世紀代の琉球が南九州の諸勢力との間にも優位な立場を築き、個別の君臣秩序を作ろうとしていた可能性が示唆されている[村井2011]。文献資料が少なくものが言えなかった先島地域からも、このような形で資料を呈示することで、琉球の帝國的側面を伺えたのではなかろうか。海域アジア世界の激動の世紀を漕ぎわたる琉球の、時代に応じたひとつの姿として捉えておきたい。

註

(1)——「奈八重山酋長。有掘川原赤蜂者。心変謀叛。兩三年間。絶貢不朝。」(『中山世譜』卷六弘治13年庚申条)
(2)——本稿の陶磁器分類は、本冊所収の陶磁器調査報告(池谷・小野ほか2021)に准ずる。

(3)——『琉球国由来記』卷二十一「各所祭祀十」

(4)——報告書では「1号石壘」「2号石壘」と呼ぶが、本稿では他の記載と統一するため「1号屋敷」などとする。

(5)——「背嶮岨。面大海。布擺陣勢。」(『中山世譜』
卷六 弘治13年庚申条)
(6)——ピロースクタイプのなかで細分できないものが
346点あるが、この大半はピロースクⅡと思われる。
(7)——フルスト原遺跡では屋敷区画ごとの発掘調査が
7区画で実施されたが、明瞭な違いは指摘できなかった。
中心部と思われる区画が、破壊されて残らなかったため
かもしれない。
(8)——『中山世鑑』卷三には成化2年(1466)に尚徳
の喜界島親征が記されているが、これは尚泰久の事跡と

する考えもある。共同研究の過程で、荒木和憲氏の報告
等から多くを学んだ。荒木氏の報告内容は(荒木2021)
としてまとめられている。
(9)——「其三曰、当西南有国、名曰太平山、弘治庚申
春、遣戦艦一百艘攻之。其国人、堅降旗而服従。翌年、
航海来献歳貢以穀布繇。是上国之勢、愈大而愈盛矣。」
(10)——嘉靖25年(1546)「添継御門の南のひのもん」
(11)——順治年間(1644-61)に廃棄され、康熙36年(1697)
に再鑄したものが現存。

参考文献

- アウエハント, C. 2004『HATERUMA—波照間: 南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相—』(中鉢良護訳) 榕
樹書林(原著はOuwehand, C. (1985) *Hateruma: Socio-Religious Aspects of a South-Ryukyuan Island Culture*.
Leiden: E. J. Brill)
- 荒木和憲 2021「古琉球期王権論—支配理念と「周縁」諸島—」『国立歴史民俗博物館研究報告』226
- 池谷初恵・小野正敏・岩元康成・小出麻友美・佐々木健策・村木二郎 2021「中世琉球における貿易陶磁調査Ⅰ」『国
立歴史民俗博物館研究報告』226
- 石垣市教育委員会 1983『ピロースク遺跡 沖縄県石垣市新川・ピロースクの遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査
報告書6
- 石垣市教育委員会 1984『フルスト原遺跡発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告7
- 石垣市教育委員会 2000『石垣島の岩陰遺跡—沖縄県石垣市内岩陰遺跡分布調査報告書—』石垣市文化財調査報告書
25
- 稲村賢敷 1957「上比屋山遺跡の発掘品」『琉球諸島における倭寇史跡の研究』吉川弘文館
- 上里隆史 2012『海の王国・琉球「海域アジア」屈指の交易国家の実像』洋泉社
- 岡本弘道 2010『琉球王国海上交渉史研究』榕樹書林
- 沖縄県教育委員会 1990a『ぐすく グスク分布調査報告書(Ⅱ)—宮古諸島—』沖縄県文化財調査報告書94
- 沖縄県教育委員会 1990b『新里村遺跡』沖縄県文化財調査報告書97
- 沖縄県教育委員会 1991『上村遺跡』沖縄県文化財調査報告書98
- 沖縄県教育委員会 1994『ぐすく グスク分布調査報告書(Ⅲ)—八重山諸島—』沖縄県文化財調査報告書113
- 沖縄県教育委員会 1997『慶来慶田城遺跡』沖縄県文化財調査報告書131
- 小野正敏 1997「村が語る八重山の中世」『大航海』14
- 小野正敏 1998「沖縄・八重山の中世廃村遺跡」『日本歴史』597
- 小野正敏 1999「密林に隠された中世八重山の村」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
- 小野正敏 2001「沖縄先島地域における発掘遺構と民家にみる掘立柱建物の問題」『埋もれた中近世の住まい』同成社
- 小野正敏 2010「先島の集落」『沖縄県史』各論編3 古琉球
- 小野正敏 2020「八重山のグスク時代—集落遺跡からの視線—」『遺跡から見た琉球列島のグスク時代』資料集
- 木下尚子編 2009『13～14世紀の琉球と福建』熊本大学文学部木下研究室
- 金武正紀 1999「再発見された八重山の古村落」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
- 金武正紀 2015「八重山の古村落—竹富島新里村遺跡の発掘成果を中心に—」『石垣市史』各論編 考古
- 慶世村恒任 2008『新版 宮古史伝』富山房インターナショナル
- 久貝弥嗣 2014「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」『南島考古』33
- 城辺町教育委員会 1989『高腰遺跡』城辺町文化財調査報告書5
- 佐々木健策・小出麻友美・池谷初恵・小野正敏・村木二郎 2021「沖縄県竹富町波照間島ミシュク村跡遺跡の調査」『国
立歴史民俗博物館研究報告』226
- 下地傑 1999「発掘された村・石垣島フルストバル村」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社
- 仲盛敦 1999「花城村跡遺跡発掘調査の概要」『村が語る沖縄の歴史』新人物往来社

-
- 平良市教育委員会 1983『住屋遺跡（俗称・尻間）発掘調査報告』
村井章介 2011「古琉球をめぐる冊封関係と海域交流」『琉球からみた世界史』山川出版社
本村麻里衣 2007「宮古諸島における石積みで囲まれた中世相当期（グスク時代）の遺跡」『廣友会誌』3
山本正昭 2004「沖縄県池間島の廃村遺跡」『考古学ジャーナル』524
山本正昭 2019「上比屋山遺跡」『沖縄の名城を歩く』吉川弘文館
与那国町教育委員会 1988『与那原遺跡』与那国町文化財調査報告書 2

（国立歴史民俗博物館研究部）

（2020 年 7 月 9 日受付，2020 年 10 月 16 日審査終了）

Imperial Aspects of the Kingdom of Ryukyu from the Perspective of the Ruins of Settlements in Sakishima Islands

MURAKI Jiro

In the Sakishima Islands, including the Yaeyama and Miyako Islands, there are ruins of stone buildings displaying masonry techniques not seen on the main island of Okinawa. A great number of Chinese ceramic wares have been excavated from these sites. Scholars have concluded that these remains date back to the late 13th and early 14th centuries, with some of the ruins that display the highest stage of development being from the 15th century. However, there are noticeably fewer artifacts from the 16th century, as it is likely that the settlement was destroyed at this time. The settlement ruins like connected cells, which notably include the ancient ruins of Hanasuku Village on Taketomijima Island, refers to an irregular stone enclosure of dozens of connected sections. The perimeter of the enclosure is protected by a cliff edge where more stones are piled up. Similar ruins are still buried under the dense forests of Sakishima, with many of them still enshrined as sacred sites.

In the Miyako area, there are many settlement ruins that were destroyed early on in the 15th century. The Minuzuma ruins, which were recently excavated and where surveys of ceramic wares have been conducted, serve as such an example. In the Yaeyama area, the majority of settlement ruins were destroyed sometime during the late 15th or early 16th century. The settlement ruins like connected cells were also destroyed during this period, and it appears that a dramatic event occurred in Yaeyama. This closely corresponds to the reign of Sho Shin of the Second Sho Dynasty and can be considered a consequence of the Oyake Akahachi revolt. In other words, this suggests that Sakishima, which was an independent cultural domain, was invaded by the Ryukyu Royal Government and that this region was annexed by the Ryukyu Kingdom as a result.

There are few historical documents that discuss the Sakishima region during the medieval period. Moreover, in early modern times, the history of this region was discussed based on history books compiled by the Ryukyu Royal Government. However, an abundance of settlement ruins and artifacts remain. Therefore, by analyzing these ruins and artifacts, we discuss the uniqueness of Sakishima and the imperial aspects of the Ryukyu Kingdom that annexed it.

Key words: settlement ruins, settlement like connected cells, ancient ruins in Hanasuku Village, ceramic ware, Oyake Akahachi revolt
